

第2章 富田林市の現況・課題



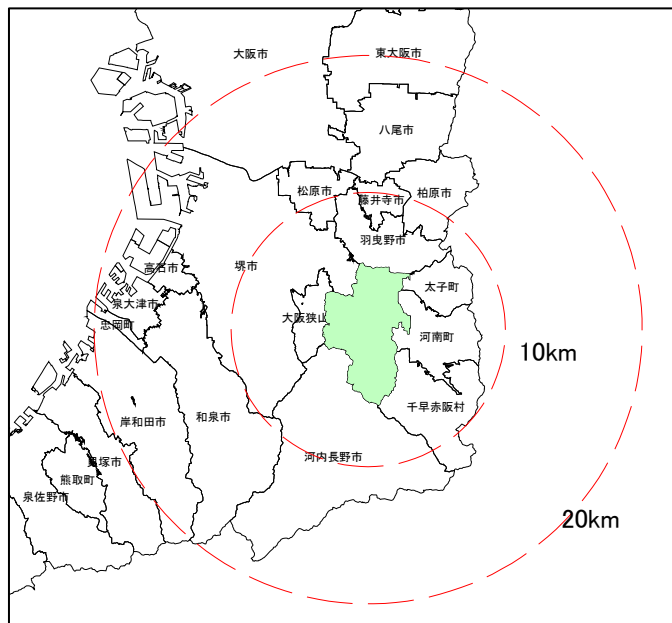
1. 現況

1-1. 富田林市の概要

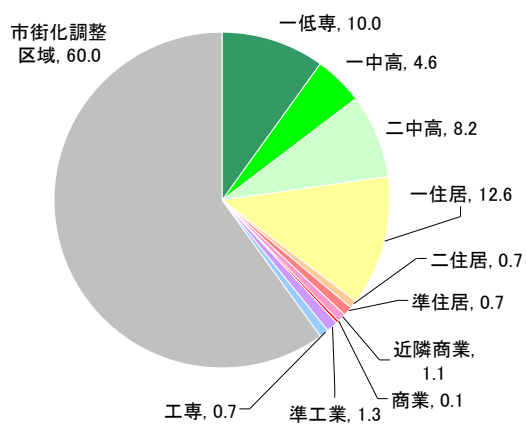
富田林市は大阪府の中心部から約20km東南に位置し、市域の面積は3,966haで大阪府域の約2.1%を占めている。

地勢としては、市域中央部を流れる石川により形成された平野部、西部の丘陵部と金剛山系に連なる南部の山地部により形成されている。

市内には、近鉄長野線、南海高野線の2つの鉄道や、大阪外環状線(国道170号)、大阪千早線(国道309号)といった広域幹線道路*がある。周辺では、南阪奈道路の開通の影響もあり、交通利便性が高い地域となっている。

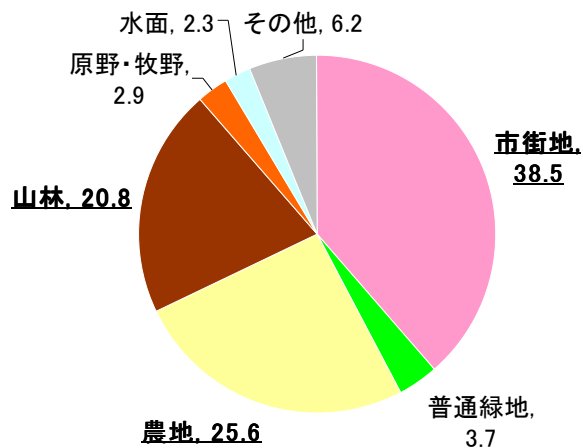


●区域区分・用途地域(%)



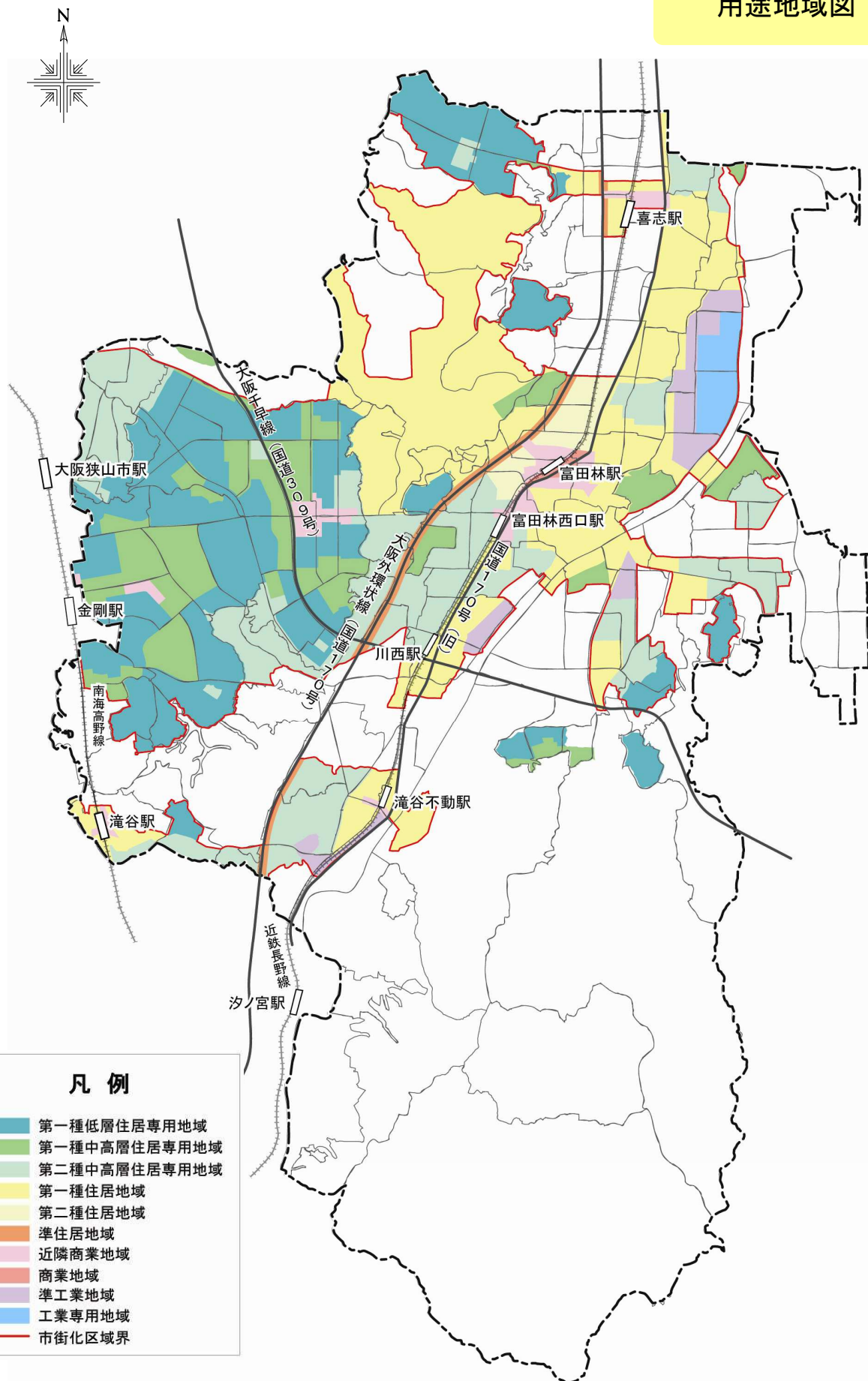
(平成 25 年 3 月現在)

●土地利用現況(%)



(平成 22 年度都市計画基礎調査)

用途地域図



1-2. 人口の推移

富田林市では平成12年まで、大都市近郊の良好な住宅地として人口流入が続き、人口・世帯数は増加傾向で推移してきた。

しかし近年における人口全般の伸び悩みや少子・高齢化^{*}の動きが加速するなか、人口は横ばいあるいは微減傾向で推移しており、コーホート要因法^{*}による将来人口推計は、減少傾向で推移するものと予測され、「富田林市総合計画(第4次)」の目標年次である平成27年には124,801人にまで減少すると予測されている。

総合計画(第4次)の将来人口をもとに、都市計画マスタープランの目標年次である平成29年の人口、世帯数を人口は124,028人、世帯数は50,956世帯と予測していたが、国勢調査結果によると世帯数は微増傾向にあるものの、人口の減少傾向がより顕在化していることから、次回の都市計画マスタープランの改訂時において、総合計画などとも整合を図りつつ将来人口等を検討する。

国勢調査人口等の推移

区 分	実績値		
	平成12年 2000 年	平成17年 2005 年	平成22年 2010 年
人口 (人)	126,558	123,837	119,576
世帯数 (世帯)	43,679	44,834	45,600
世帯人員 (人/世帯)	2.90	2.76	2.62



4か月児健康診断

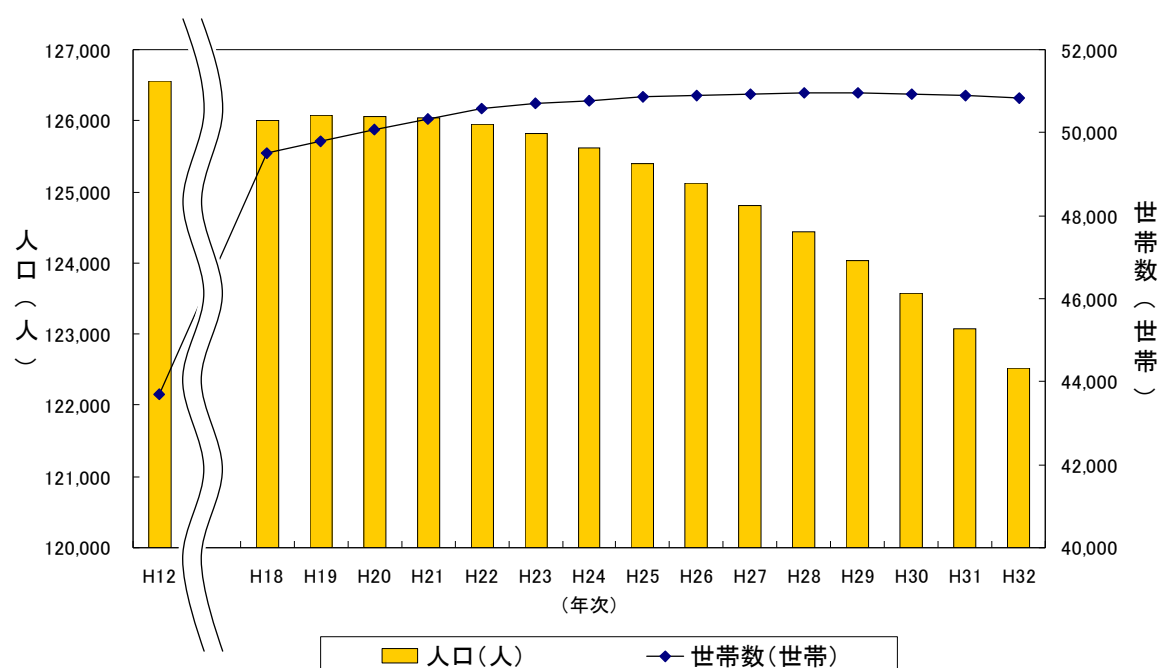
人口・世帯数の推移と予測(コホート要因法*による将来人口推計)

区 分	実績値	予測値					参考値
	平成12年 2000 年	平成19年 2007 年	平成22年 2010 年	平成24年 2012 年	平成27年 2015 年	平成29年 2017 年	平成32年 2020 年
人 口 (人)	126,558	126,075	125,951	125,622	124,801	124,028	122,527
世帯数 (世帯)	43,679	49,793	50,583	50,777	50,939	50,956	50,841
世帯人員 (人/世帯)	2.90	2.53	2.49	2.47	2.45	2.43	2.41

(注)世帯当たり人口は、全国平均の将来予測値を用いた。

人口予測値は、平成10～11年頃に見られた転入、転出の均衡状態が継続するケースで予測。

富田林市の人口・世帯数の将来推計



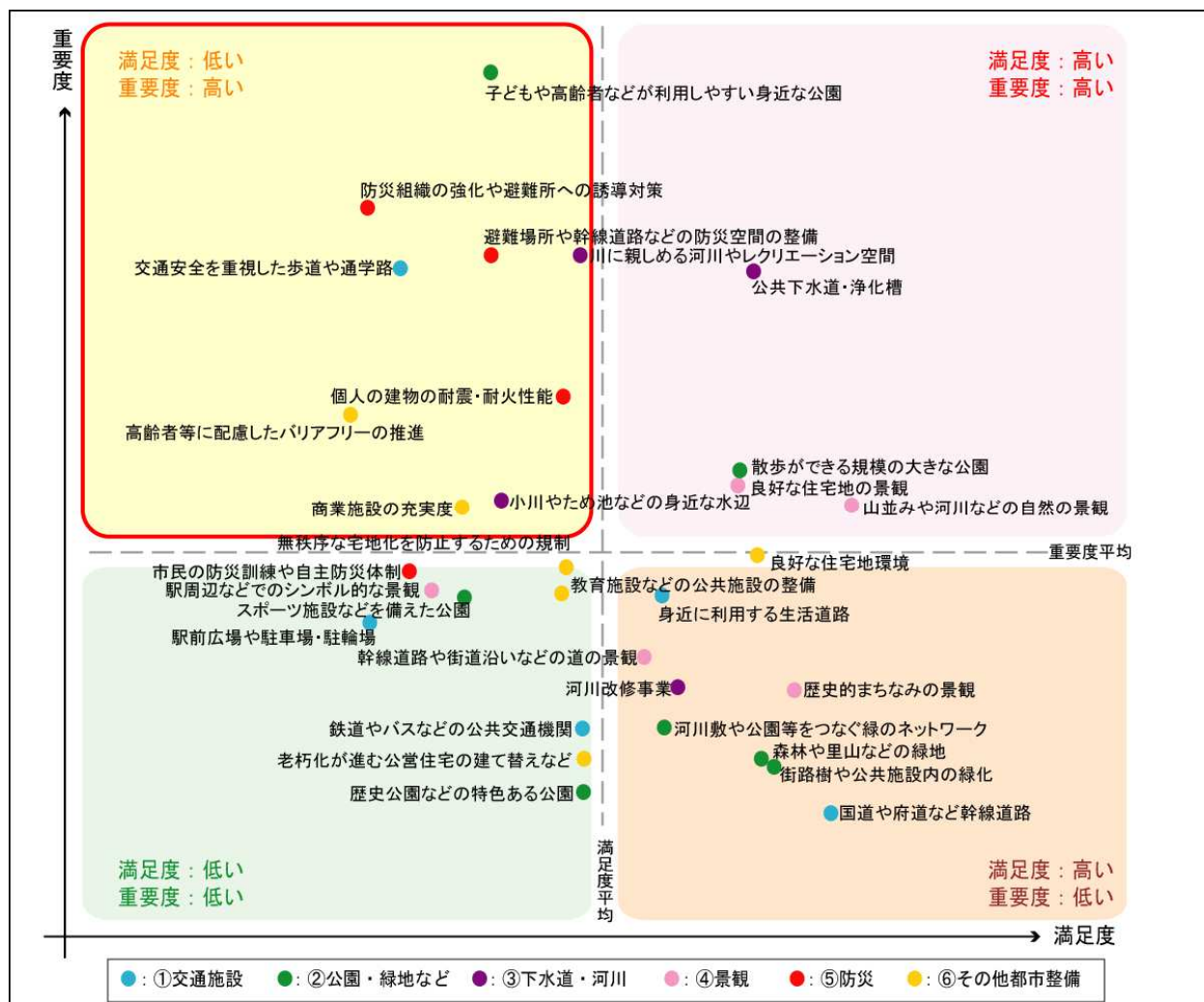
2. 市民意向の状況

16歳以上の市民の中から、3,000人を無作為に抽出し実施した「住民意識調査」は、1,572人(回収率52.4%)から回答があり、富田林市民が望む将来の都市の方向性を整理すると次のとおりである。(都市計画マスタープラン(第2次)改訂時に実施)

●現状の生活環境への満足度、整備の重要度について

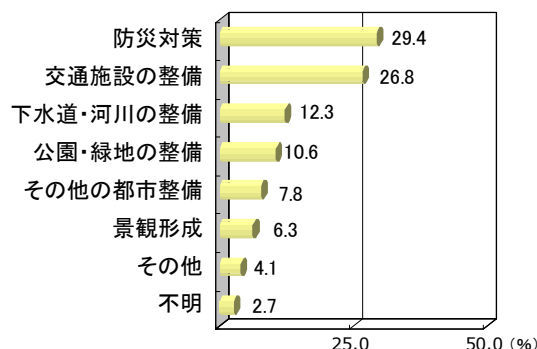
“現状の生活環境への満足度”と“今後の都市整備の重要度”の相関から、満足度が低く、重要度が高い項目(赤色枠内)が、調査結果から見られる市民の望む重点的な都市施策と考えられる。具体的には、公園関係では“子どもや高齢者などが利用しやすい身近な公園”、防災関係では“防災組織の強化や避難所*への誘導対策”、“避難場所や幹線道路などの防災空間の整備”、交通関係では“交通安全を重視した歩道や通学路”、下水道・河川関係では“川に親しめる河川やレクリエーション空間”、“小川やため池などの身近な水辺”、その他の整備では“高齢者等に配慮したバリアフリー*の推進”、“商業施設の充実度”が望まれている。

現状の生活環境への満足度と、整備の重要度の相関図



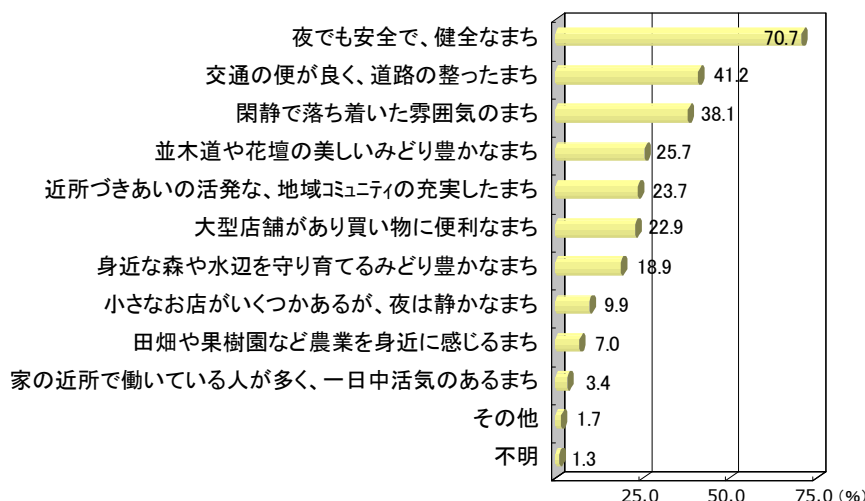
重要な施策、地域の望ましい将来像、市街化調整区域の土地利用の方向性、まちなみを守るためのルールづくりに関する設問の回答結果を次に示す。

●主要な都市施策のうち最も重要な施策について



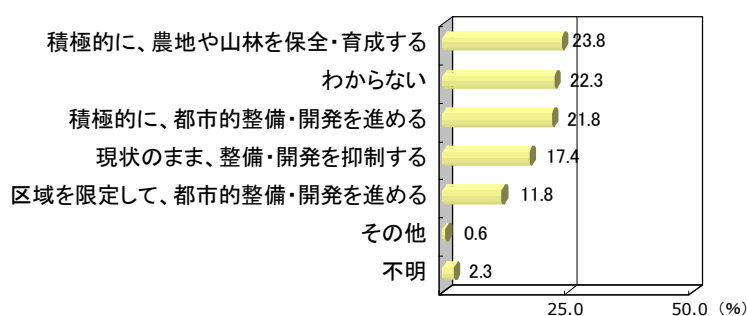
最も重要だとする施策については、“防災対策”が最も多く約29%で、次いで“交通施設の整備”が約27%となっている。

●地域の望ましい将来像について(複数回答)



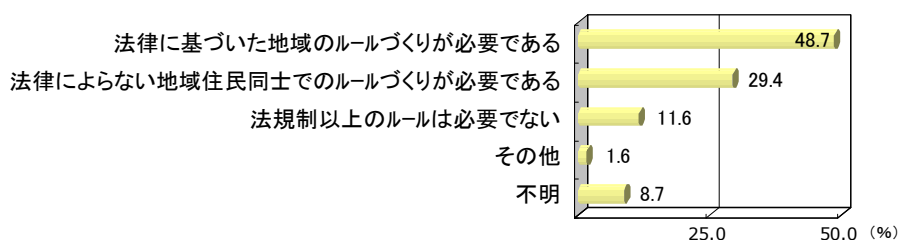
“夜でも安全で、健全なまち”が最も多く、全体の約70%以上を占めている。次いで、“交通の便が良く、道路の整ったまち”が約41%、“閑静で落ち着いた雰囲気のあるまち”が約38%を占めている。

●市街化調整区域の土地利用について



大きく分類すると、“農地・山林を保全・育成あるいは整備・開発を抑制”という意見が約41%、“都市的整備・開発を進める”という意見が約34%、“わからない”という意見が約22%となっており、大きく意見が分かれている。

●まちなみを守るためのルールづくりについて



何らかのルールづくりが必要という意見が全体の約78%を占めており、その内でも“法律に基づいたルールづくりが必要”が全体の約49%と半数近くを占めている。

3. 課題

社会的な環境は大きな変革期を迎えており、特に少子・高齢化^{*}や全体人口の減少、高度情報化^{*}・バイオ技術^{*}などの技術革新、経済の国際化や所得格差の拡大による経済環境の変化、身近な場所での犯罪発生や災害リスクの高まりなど社会不安の高まりが進みつつある。

富田林市では昭和40年代以降、本格的な宅地開発により急速に市街化が進み、特に市西部では土地利用に大きな変化が生じてきた。また、大阪外環状線や国道309号の整備、南阪奈道路の建設など、急速な広域幹線道路網の整備が進められてきたことで、新たな土地利用の変化が予想される。

一方、長い歴史を有する南河内地域の中心都市であった富田林寺内町が「重要伝統的建造物群保存地区^{*}」に選定されているなど、数多くの文化的な遺産の保存が求められている。

今後、富田林市が南河内地域の中心都市として機能し、秩序ある土地利用形成や農業環境との調和、利便性の高い交通環境形成や自然的環境の保全など、誰もが住み続けることができる都市となるためのまちづくりの課題を次のように整理する。

●土地利用形成からみた課題

・住宅地開発と自然環境、農業環境との調和

昭和40年代以降、旧市街地周辺において大小の住宅地が開発されてきた。また、市街化調整区域において面的な住宅地開発が進められており、自然環境の保全あるいは農業環境との調和などが課題となっている。

・市街化調整区域における土地利用計画の検討

都市計画法^{*}の改正などにともない、市街化調整区域における相当程度の土地利用が制限されたことにより、市域全体の都市計画の見直しと合わせた土地利用計画の検討が必要となっている。特に幹線道路沿道における土地利用については、交通利便の向上を活かしつつ周辺環境と調和した秩序ある市街地の形成が一体的に図られるよう、区域の特性に応じて地域のまちづくりに寄与できる土地利用計画を誘導することが必要となっている。

・ニュータウン^{*}の活性化

高度経済成長期に大規模な住宅開発が実施されたニュータウン^{*}では、社会環境の変化とともに人口の減少や少子・高齢化の進行、住宅や都市施設の老朽化など、様々な問題が顕著になっているため、ニュータウン^{*}の活性化を検討していく必要がある。

●交通体系からみた課題

・幹線道路網の整備・改善

幹線道路は、交通渋滞の緩和、市域内東西地域のネットワーク強化、災害発生時における避難ルート等、良好な都市景観形成、環境負荷の低減などの重要な役割を担っており、広域圏と本市を結ぶ大阪外環状線(国道170号)、大阪千早線(国道309号)を骨格とし、これらにネットワークする都市計画道路を初め、その他幹線道路の整備・改善が課題となっている。

・生活道路の整備・改善

住宅地内に流入する通過交通の軽減、必要な道路幅員や歩道の確保、災害時における避難ルート等の設定と安全性の確保などの生活道路の整備・改善が課題となっている。

・交通等バリアフリー^{*}に対する配慮

主要な道路における歩道などの歩行者空間の不足や段差の解消など、交通等バリアフリー^{*}に配慮した整備が必要となっている。

- ・公共交通の活性化

幹線道路の整備にあわせた市内の主要な生活道路として機能する補助幹線道路などの道路ネットワークを確立するとともに、公共交通機関へのアクセス道路の整備や公共交通機関等の充実を図ることにより、自動車のみに依存しない公共交通の活性化が課題となっている。

●その他都市施設*整備からみた課題

- ・既成市街地*における都市施設*の整備推進

既成市街地*では、子どもや高齢者なども利用しやすい身近な公園の整備、老朽化した道路施設等の改善、公共下水道や浄化槽*の整備などが課題となっている。

●都市環境形成からみた課題

- ・富田林らしい景観形成

富田林寺内町の歴史景観の保全のほかに、富田林の“顔”となる駅前周辺など、シンボルとしての景観形成、河内ふるさとのみち*づくり、山なみ景観や田園景観などの自然景観の保全が必要であり、そのための景観まちづくりへの取り組み、「景観計画」の策定などが課題となっている。

- ・防災まちづくりの推進

東南海・南海地震など、大規模地震*発生の危険性の高まりが指摘される中で、都市の不燃や耐震化などの総合的な防災対策を進めていかなければならない。そのためには、都市基盤施設*の整備及び市街地環境の充実などを図る必要がある。

また、人口の減少、少子・高齢化が進行する状況下においては、地域主導による自主防災組織の設置など、ソフト面からの地域減災(防災)力の強化も課題となっている。

- ・人や環境に配慮したまちづくりの検討

多数の人が集まる鉄道駅や公共施設などにおいて高齢者や障がい者などに配慮したバリアフリー*のまちづくりを進めるとともに、低炭素社会*の構築など地球温暖化*への対応や環境汚染の防止などについて検討する必要がある、市民参加による環境まちづくりを支援する必要がある。

特に、水洗化を始めとする生活排水対策については、適正処理100%の実現を目指して、効果的に推進する必要がある。

●自然的環境からみた課題

- ・自然環境や歴史環境、景観の阻害

緑ゆたかな自然環境や農業用水路などの水環境・景観、さらに、富田林寺内町周辺の歴史環境・景観などが、都市化の進展などにより阻害されている部分もあり、自然環境と都市環境の調和が課題となっている。

- ・自然環境の保全とレクリエーション的利用の調和

石川や嶽山などに代表される豊かな自然環境に恵まれており、その保全や活用、親水空間*の創出の方向について検討する必要がある。

- ・農村環境の保全と活用

都市近郊の農村地域として農業公園*の整備など、農村環境の保全と活用について検討を進める必要がある。また、市街地内部に残されている農地については、身近な自然的環境と位置づけ、緑地として保全していく必要がある。

